セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.23

編　集　1991.3.30
発　行　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　田　中　猛　善
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
電話 0955—43—3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

色絵孔雀花文大皿（いろえくじゃくはなもんおおざら）

館蔵資料

有田皿山
17世紀後半
口径32.8cm　高さ7.1cm　高台径13.7cm

器形はやや深めで、口部が外反りとなる。見込み二重圏線内に、孔雀に牡丹、蝶などを赤、緑、紫、黄、黒の上絵具で描き、周縁部は四方割の窓内に花唐草文を配する。濃厚な色使いで、筆致も巧みである。裏面は赤の圏線に梅樹文を入れる。高台際に指跡が残り、高台内に上絵赤で二重角内に判読不明の銘を入れる。柴田夫妻コレクションの1つである。

特別企画展のお知らせ

平成３年度特別企画

「肥前の色絵―その始まりと変遷―」展

○主旨

色絵磁器とは、磁器の表面に赤、青、緑、黄などの上絵具で文様を表現する技法で、日本では江戸時代前期に、有田ではじめて焼かれました。

肥前の色絵磁器は華麗で優美な名品を数多く生み出し、日本国内で高い声価を得るとともに、ヨーロッパや東南アジアなど海外へも輸出され、多くの人々の心を魅了し、ヨーロッパの陶芸へも大きな影響を与えました。

ところで、肥前の色絵磁器に関する研究は、従来、「古伊万里」・「柿右衛門」・「鍋島」の三様式を基本として考えられてきました。しかし近年、近世考古学等の成果により、肥前磁器に対する研究が大きく進展し、とりわけ人々の関心の高い色絵磁器についても、従来の考えでは説明しにくくなってきています。このようななかで、昭和63年に有田町・赤絵町遺跡の発掘調査が行われ、色絵磁器片が多数出土し、衆目を集めたことは記憶に新しいことです。

本展では、色絵磁器に関する最近の調査・研究の成果をふまえ、肥前の色絵磁器について、その初期から、盛期をへて、江戸時代後期にいたる変遷をたどり、肥前陶磁研究の一助とするものです。

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館　第１・第２・第３展示室

○会期

平成３年10月19日(土)～11月24日(日)の32日間

休館日　10月21日(月)・28日(月)・11月５日(火)

11日(月)・18日(月)

○観覧料

大　　人　510円（410円）

大学・高校生　250円（150円）

中学・小学生　150円（100円）

＊（　）内は20名以上の団体

○展示構成

肥前の色絵磁器……180点

赤絵町遺跡出土陶片……200点

古窯跡出土陶片……　80点

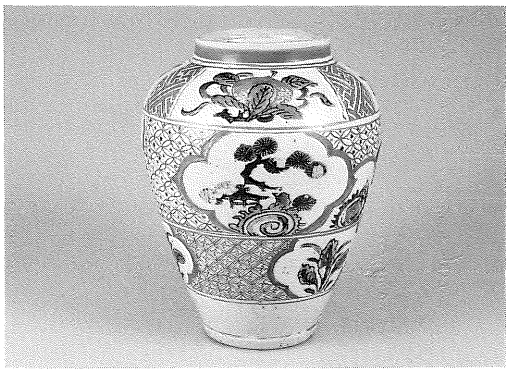
○図録

展示品の図録を刊行する。

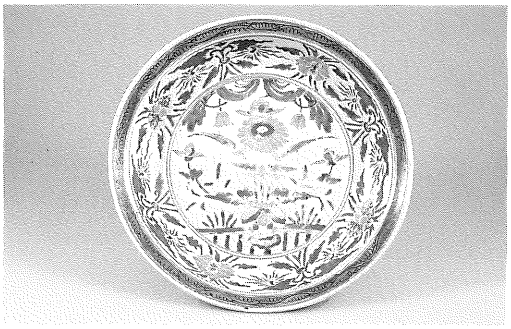
講演会

会期中に講演会を行う。

色絵蔦文台鉢
有田皿山　17世紀後半



色絵松竹鶴文壺
有田皿山　17世紀後半



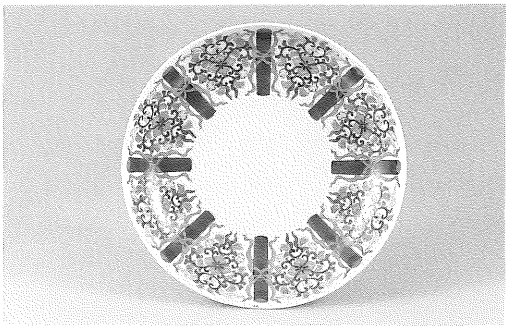
色絵花籠図皿
有田皿山　17世紀後半

色絵唐獅子牡丹図十角皿
有田皿山　17世紀末

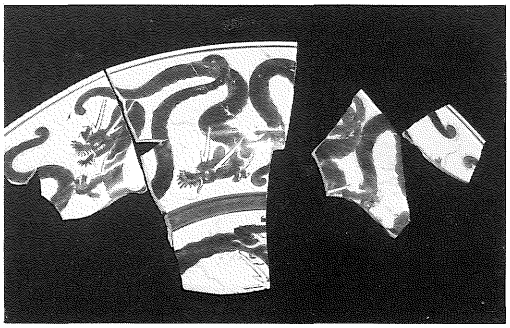
色絵唐花松文深鉢
有田皿山　18世紀前半

色絵龍文大皿
有田皿山　18世紀前半

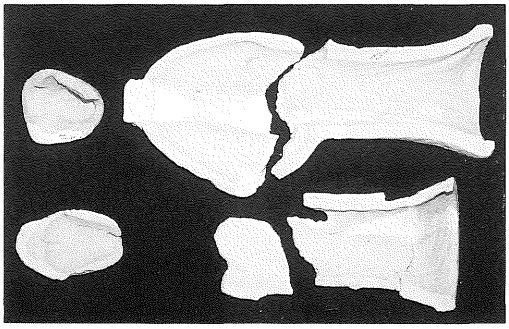
色絵唐花文皿
鍋島・日峰社下窯　17世紀後半



色絵巻軸文皿
鍋島藩窯　18世紀前半



色絵龍文大皿
有田・赤絵町遺跡出土



土型（婦人像）
有田・赤絵町遺跡出土

展覧会のお知らせ

柴田コレクション展（Ⅱ）

柴田明彦・祐子氏ご夫妻から寄贈を受けた江戸時代の有田磁器1076件2476点の内、471件1297点は既に「柴田コレクション展(I)」として一般に公開いたしましたが、今度はその残りの605件1179点と、その後に追加寄贈されたものを展示いたします。今回の展示は、前回の展示でも明らかになったように、17世紀前半から18世紀後半までの有田磁器の流れが示されますが、特に様式の変遷と形の多様性において特徴があります。七寸皿を中心として各時代の様式が示され、初期の勢いのある力強い表現から、17世紀末の繊細で優美な表現、あるいは18世紀の安定した表現まで様式の変化を追うことができます。また壺や水注や香炉、盃台、小皿など形の変化に富んだ数多くの作品により、有田磁器の形態の多様性を知ることができます。

会　場

佐賀県立九州陶磁文化館　第１・第２・第３展示室

会　期

平成３年９月７日(土)～10月13日(日)　34日間

休館日　月曜日（９月９日、30日、10月７日）

観覧料

大　　人　200円（150円）

大学・高校生　150円（100円）

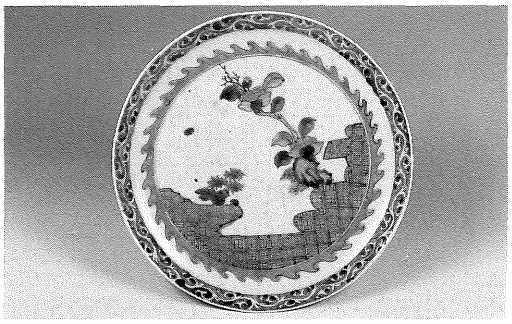
中学・小学生　70円（ 50円）

（　）内は20人以上の団体

染付岩鹿文捻輪花皿　有田
口径22.2cm 高さ2.4cm 底径15.4cm 1650～60年代

染付柴垣草花文皿　有田
口径21.6cm 高さ2.6cm 底径14.0cm 1670～80年代

色絵菊牡丹文輪繋台鉢　有田
口径24.0cm 高さ10.9cm 底径14.5×14.5cm
1680～1700年代



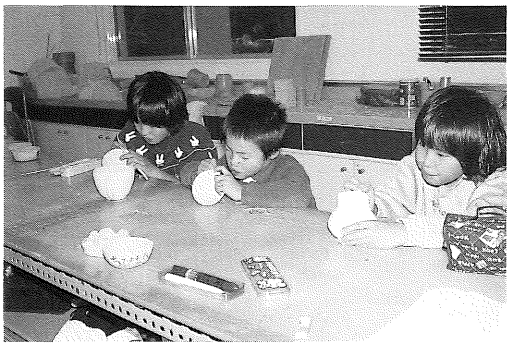
染付椿唐草文皿　有田
口径20.3cm 高さ3.2cm 底径8.9cm 1640～50年代

染付岩牡丹文丸形水注　有田
口径7.4cm 高さ22.2cm 底径9.2cm 1670～90年代

行事・展覧会スナップ

青少年科学活動促進事業 焼物科学教室

佐賀県青少年科学活動促進事業の焼物コースが、平成２年10月27日から11月18日までの土曜日と日曜日の計８回、当館の施設を利用して行われました。今回は小学校３年生から中学校１年生まで12名が受講しました。焼物の基礎的学習とともに、実際にロクロ等で成形し、窯で焼き上げ、全員、快心作を作り上げました。



実習風景

陶芸文化講座

平成３年３月23日に、当館講堂において陶芸文化講座が開催されました。今回は福岡市美術館学芸員・尾崎直人氏に「高取焼について」と題して講演していただきました。高取焼は、福岡県を代表する茶陶として知られ、その歴史や美的特質をスライドをまじえ、紹介されました。約80名の聴講生があり、熱心に話に聞き入っていました。

有田工業高校作品展

第２回窯業科作品展 第22回デザイン科卒業制作展

平成３年１月29日から２月３日まで、第１展示室および展示ホールにおいて、有田工業高校作品展が開催されました。全日制デザイン科に加えて、昨年度から定時制デザインコースと全日制・定時制窯業科が参加し、実習や課外活動等で制作した陶芸作品やグラフィック作品、オブジェなどが展示され、観覧者が生徒の作品に見入っている姿がみられました。

展示風景

第９回西松浦郡小中学校 学童美術展

平成３年２月６日から２月17日まで、第１展示室において、第９回西松浦郡小中学校学童美術展が開催されました。小学生の絵画、陶芸、粘土や紙で作った造形、中学生の彫塑、絵画、木彫などが展示されました。いずれもユニークな発想と造形の面白さで、見る人の目を楽しませてくれるものでした。会期中、家族で訪れるなど、多くの入観者で賑わいました。

展示風景

第３回伊万里陶青会展

平成３年２月19日から２月24日まで、第１展示室において、第３回伊万里陶青会展が開かれました。今回のテーマの「あかりとインテリア」は、照明具とインテリア用品を陶磁器で表現したもので、過去２回の食器を中心とした提案とは、かなり趣きが異なり、天井の照明を最小限におさえた演出効果もあり、観覧者も高い関心を示していました。

展示風景

第２回九州陶磁器デザイナー協会展

平成３年２月26日～３月３日まで、第１展示室において、第２回九州陶磁器デザイナー協会展が開催されました。今年のテーマは「ビールを飲む器」です。会員の提案、デザインしたビアジョッキ、ビアグラスなどとコンセプトを表現したパネルとで構成され、またビデオ映像によるイメージ提案もあり、楽しい展示となりました。

展示風景

第５回有田窯業大学校卒業制作展

平成３年３月５日から３月10日まで、第１展示室・展示ホール・エントランスホールにおいて、第５回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。本科生と研究生の卒業制作の作品・研究と、短期研修生（下絵付、上絵付、一般ロクロ、特別ロクロ研修）の作品も展示され、研究の成果が示されました。また参考出品として多治見市陶磁器意匠研究所と石川県立九谷焼技術研究所の卒業制作品も展示され、会期中、多くの人々が観覧に訪れました。

展示風景

第6回有田陶交会展

平成３年３月19日から３月24日まで、第１展示室において、第６回有田陶交会展が開催されました。今年のテーマは「魅せる器」で、食器や酒器等が展示されました。また３月21日には「魅せるコンサート」として、福岡ブラスクインテットの演奏、琴、フルートの合奏等の記念演奏会も行われました。

展示風景

シリーズ
やきものにみる文様 (20)
破甕救児文様

大漢和辞典によると「破甕救児」とは宋の司馬光が幼時、石で甕を破り、甕中に落ちた児を救った故事。『冷斎夜話』（10巻。宋の釈恵洪撰。自己の見聞を雑記する。その大部分は詩話）に「司馬温公、童時興二群児一戯、一児墜二大甕水中一、群児驚走、公以レ石撃レ甕、水迸出、児得レ不レ死」とある。

司馬光が幼時、多くの子供と遊んでいた時、ひとりの子供が水の入った大甕に落ちて溺れそうになった。

多くの子供は驚いて、いっせいに逃げ散った。司馬光はその時、あわてずに石をもって甕を撃った。すると甕から水がほとばしり出て、落ちた子供は死なずにすんだ、というお話し。

司馬光（1019～86）は宋代の学者、政治家。字は君実。山西省の人。迂夫、迂叟と号し、また故郷の地名によって涑水（そくすい）先生、封爵によって温国公、温公などとよばれた。神宗の初年（1068）に王安石（1021～86）の新法に反対して政府を去り、『資治通鑑』（294巻。1084年に成る。前403年～960年に至る1363年間の事跡を編年体に記す）の編集に専念した。哲宗の初めに召されて宰相となり、新法をやめて旧法を復活したが、まもなく病死した。

この八角皿は18世紀末から19世紀初めにかけてのイギリスのチェルシー窯の作品。17世紀末の有田皿山の柿右衛門様式の作品のひとつの写しである。1730年代のドイツ・マイセン窯をはじめ、イギリス・ボウ窯などヨーロッパ諸窯では、この図柄の倣製品が好んで作られた。

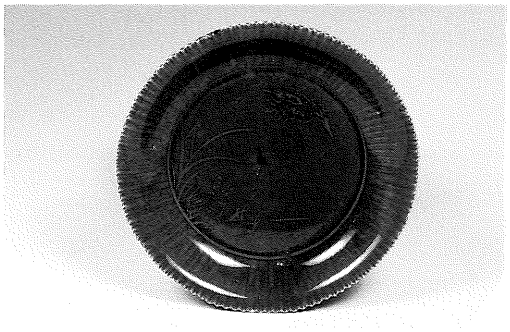
（吉永陽三）

色絵破甕救児図八角鉢
イギリス・チェルシー窯　18世紀末～19世紀初
館蔵

シリーズ
やきものの技法 (20)
瑠璃釉

本焼用の透明釉の中に呉須を入れて作る瑠璃色の釉薬。単に瑠璃と呼ぶ場合は、釉薬を意味する場合と、瑠璃釉の掛かった作品を指す場合がある。陶器に用いられることはほとんどなく、磁器によく使われる。

染付が作られている窯場は、同じ呉須を使うため基本的には瑠璃釉が用いられた可能性がある。有田では17世紀前半の、いわゆる初期伊万里の時代から瑠璃釉が用いられている。初期の瑠璃釉は比較的淡い色調であり、17世紀後半以降には紺色の色調のものに移行する。ただし1650から60年代には淡い色調の瑠璃釉が多く見られる。この場合、薄く濃みをした染付と淡い色調の瑠璃を区別しにくい。染付によって薄く塗られたものを薄瑠璃と呼んでいるが、これは瑠璃釉の薄いものと混同されている。瑠璃と薄瑠璃の区別は、釉薬そのものが瑠璃色であるものが瑠璃であり、染付で薄く濃みをしたあと透明釉を掛けたものを薄瑠璃と見なすことが出来る。断面を見れば、素地の上に藍色の釉薬のあるのが瑠璃であり、素地の上に藍色の呉須がありさらにその上に透明の釉薬があるのが薄瑠璃である。薄瑠璃は染付の一種であり、瑠璃は色釉であるところに違いがある。しかし1650から60年代の有田磁器においては、淡い瑠璃釉を施したあとからさらに透明釉を掛けることが多いので難しいのである。



瑠璃釉色絵葦雁文輪花皿　有田
口径14.1cm　1650～60年代
館蔵(柴田夫妻コレクション)

藍色の瑠璃釉に赤や金の上絵付けをする作品も多い。写真の作品は赤で葦雁文が描かれている。地の色が濃いので上絵付けが目立たないが、白地に色絵とはまた違った趣がある。

（鈴田由紀夫）

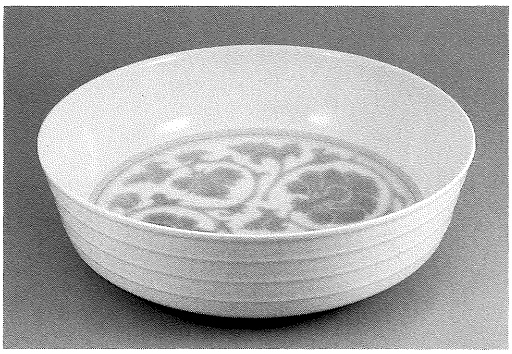
陶磁資料寄贈者芳名（敬称略）

〔平成２年４月１日～３年３月31日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

ご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展（平成３年５月21日～６月２日）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。なお、柴田明彦・祐子ご夫妻からご寄贈いただいた資料は、柴田コレクション展（平成２年に柴田コレクション展（Ⅰ）として、すでに約半数を公開・展示）で特別展示いたします。

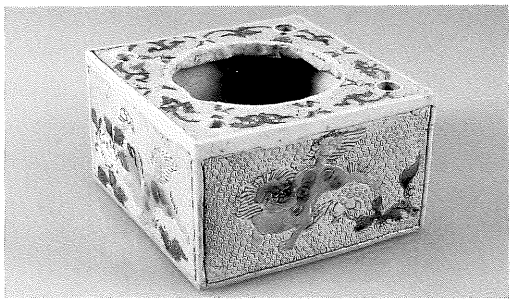
中島政利	佐賀県	染付徳利（大正十二年銘）
松永くに	佐賀県	染付草花文小皿
中山武夫	佐賀県	褐釉大甕（正保二年銘）、染付鶴樹木文筆立（弘化三年銘）
井上萬二	佐賀県	白磁緑釉牡丹彫文鉢
柴田明彦　祐子	千葉県	染付山水陽刻唐花文輪花皿など、計1076件
山崎隆生	福岡県	色絵童子像
笹倉一男	福岡県	飴釉飛鉋文瓶
S.R.ライオンズ	イギリス	色絵紋章文皿
小橋一朗	埼玉県	染付牡丹文輪花皿
富樫次男	秋田県	染付梅折枝文皿
永田エツ	長崎県	褐釉大甕
中村　質	福岡県	染錦花卉文小壺
井村幸裕	京都府	染付麒麟陽刻雲文皿、色絵牡丹獅子文インク壺



白磁緑釉牡丹彫文鉢
井上萬二作　平成元年(1989)　井上氏贈

色絵童子像
中国・明時代　17世紀　山崎氏贈

染付牡丹文輪花皿
有田皿山　17世紀後半　小橋氏贈



色絵牡丹獅子文インク壺
有田皿山　18世紀前半　井村氏贈

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始(12月28日～１月４日)休館

観覧料　一般200円（150円）／大学・高校生150円(100円）／中・小学生70円（50円）／( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。

交　通　佐世保線有田駅下車徒歩10分